

AAHA CON 2023
(Annual Conference of the American Animal Hospital Association)
参加レポート

2023年9月19-25日
カリフォルニア州サンディエゴにて
副院長 獣医師 勤務15年目 山下弘太
提出日 2023年10月5日

● はじめに

2022年、当院は北米以外では初めてとなる AAHA 認定病院となった。以降、AAHA 日本支部が当院に置かれることとなり、松沼 GM の他 VT のメンバーが活動している。AAHA の認定を希望する日本の動物病院を我々ダクタリのメンバーが評価し、認定をサポートしているのだ。これは、日本の動物病院の質の向上、AAHA 認定病院への押上げを直接私たちダクタースタッフの手で行っているということであり、大きな意味があることだと思う。

これらの活動の結果、2023年には早速5つの AAHA 認定病院が日本国内に生まれた。オールハートアニマルリファーマルセンター (Dr.池田：東京都町田市)、ダクター動物病院品川ウェルネスセンター (Dr.宮崎：東京都品川区)、ダクター動物病院関西医療センター (Dr.山崎、Dr.小山：大阪府堺市)、日本大学動物医療センター (Dr.中山、Dr.枝村：神奈川県藤沢市)、JASMINE 動物総合医療センター (Dr.上地：神奈川県横浜市) である。

今回はこれらの病院の AAHA 認定取得に関する表彰が AAHA CON で行われるということで各院の代表者と共に参加し、現地の AAHA 認定病院を訪問してきたので、報告する。

● AAHA CON 2023

AAHA の年次大会である AAHA CON は他の学会同様、全米各地で毎年場所を変えながら行われている。今年はカリフォルニア州サンディエゴでの開催であった。現地は地中海性の気候で温かいが乾燥しており、大変過ごしやすい。海岸沿いはハーバーとなっており景観も良い。ハーバーの中心には空母ミッドウェイが博物館として

展示されており、すぐ対岸には広大な米海軍基地も存在している。定期的に米海軍のへりが飛び交い、常に軍の存在を感じる街でもある。



ホテルからバス停へ先にはハーバーが見える



係留展示されている帆船



巨大な空母/博物館 ミッドウェイ

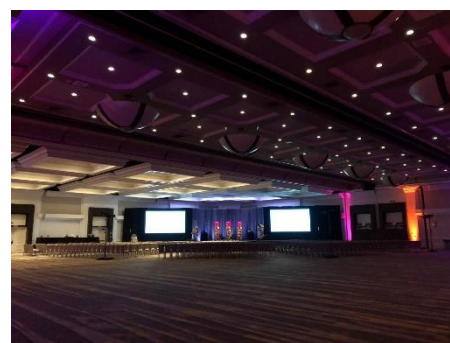
カンファレンスはベイサイドの大きなホテルで行われており、セミナールームもかなり広い。AVMA ほどではないものの、多くのセッションが複数の会場で同時に行われている。エキシビション会場にもたくさんの企業が出展していた。



会場となったホテル マンチェスター
グランドハイアットサンディエゴ



AAHA CON 登録会場



表彰式場/エキシビション会場

講義内容は全体的にベーシックであり、一般開業医向けの診療レベル底上げという目的がうかがえる。その中でも、最新情報として私たちの診療の参考にすべきと感じた以下のセッションについて受講した。

受講したセッション

- Sometimes They Aren't Old and Skiny – The Hyperthyroid Cat of the 21st Century (年老いても痩せてもいないこともある - 21世紀の甲状腺機能亢進症の猫) / Renee Rucinsky, DVM, DABVP (F)
- That Cat is Diabetic – Now What? More Than Just Insulin, and What the Heck Am I Supposed to Do with SGLT2 Inhibitors? (その猫、糖尿病です-さあどうする? インスリンだけでなく、SGLT2 阻害薬で一体何をすればいいのか?) / Renee Rucinsky, DVM, DABVP (F)
- Awards and Gavel Pass (表象と引継式)
- Key Note Speaker (キーノートスピーカー) / Rebecca Heiss, Ph.D.
- 2023 AAHA Senior Care Guideline Part1 (2023 AAHA シニアケアガイドライン パート 1) / Ravi Dhaliwal, DVM, MS DACVIM, DABVP
- 2023 AAHA Senior Care Guideline Part2 (2023 AAHA シニアケアガイドライン パート 2) / Ravi Dhaliwal, DVM, MS DACVIM, DABVP
- Euthanasia Re-imagined: Is it Time to Move Away from Propofol Once and for All? (安楽死再考: 今こそプロポフォルから脱却する時か?) / Kathleen Cooney, DVM, CHPV, DACAW resident
- Mixing Business and Death: Doing Things Better (ビジネスと死の混合: より良いことをするために) / Kathleen Cooney, DVM, CHPV, DACAW resident
- Stayin' Alive: CPR Training for the Veterinary Team (獣医療チームのための心肺蘇生トレーニング) / Alyssa C. Mages, BS, CVT
- Updates in Liquid Biopsy: From Cancer Screening to Post-Treatment Monitoring (リキッドバイオプシーの最新情報: 癌のスクリーニングから治療後のモニタリングまで) / Andi Flory,

DVM, DACVIM (Oncology)

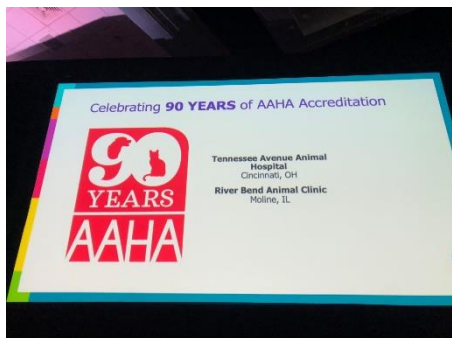
- A Hitchhikers Guide to the Canine Vaccination Guidelines (犬のワクチン接種ガイドラインへのヒッチハイクガイド) / Jhon Ellis, DVM, PhD, DACVP, DACVM
- Ten Tips and Tricks That Could Save Your Orthopedic Exam (整形外科検査を救う 10 のヒントとコツ) / Courtney Cambell, DVM, DACVS-SA
- The Skipping Dog: A Mysterious Lameness with an Elusive Diagnosis (スキップしている犬：謎めいた跛行ととらえどころのない診断) / Courtney Cambell, DVM, DACVS-SA
- Tips to Improve the Success of Small Animal Surgery of the Urinary Tract (小動物の尿路外科の成功率を高めるコツ) / Michael Jaffe, DVM, MS, CCRP, DACVS
- Treating Challenging Perianal and Perineal Disease in Dogs (困難な犬の肛門周囲および会陰部疾患の治療) / Michael Jaffe, DVM, MS, CCRP, DACVS
- Tips Improve the Success of Small Animal Gastrointestinal Surgery (小動物の消化器外科の成功率を高めるコツ) / Michael Jaffe, DVM, MS, CCRP, DACVS
- Servant Leadership for Mentorship (メンターシップのためのサーバント・リーダーシップ) / Ewan D. S. Wolff, PhD, DVM, DACVIM (SAIM)
- Rabbit Anesthesia: Learn to Be Less Reliant on Inhalant Anesthetics and Monitor Your Patient Effectively (ウサギの麻酔：吸入麻酔薬への依存を減らし、患者を効果的にモニターする方法を学ぶ) / Laila Proenca, MV, DVM, MS, PhD, DACZM

日本国内では未発売の新薬を使用した治療法や検査法なども紹介されており、多くの最新情報を得ることができた。また、エキシビション会場にはこれら製薬会社の多くが協賛企業として出展しているため、講義の合間に実際にメーカーのブースに赴いて詳しい話を聞くこともできた。米国滞在中に購入することはできなかったもの

の一部の薬剤は日本から購入することもできるとの事で、早速院内で情報共有し診療に活かしていきたいと考えている。

● 記念式典と授賞式

AAHA は今年創立 90 周年を迎える。90 年前というと 1933 年、第二次世界大戦勃発よりもさらに前である。この時期に動物病院協会たるものが存在していたことには驚くほかない。会場では AAHA の長い歴史がスライドショーで流されていた。AAHA 創立時の状況、創立時から認定を受けており AAHA と同じく認定 90 周年を迎える 2 つの病院 (River Bend Animal Clinic (イリノイ州) と Tennessee Avenue Animal Hospital (オハイオ州))、さまざまな獣医学的な発見、治療法開発、変化と共に発展してきた AAHA、その長い歴史の最期の 1 ページ、本年の 90 周年に向かう直前のスライドに私たちダクター動物病院東京医療センターの認証取得、AAHA 初のアジア進出が刻まれていた。日本の動物病院、アジアの動物病院にとって大きな変化であり、その認証は私たちの想像以上に驚きをもって受け止められていたが、AAHA にとっても大きな一歩であったのだと思うと誇らしい気持ちになった。



AAHA 認定 90 年を迎える 2 病院



表彰に臨む日本からの参加者



日本からの加入は特別に表彰された



2023 新たに AAHA 認定を取得した日本の 5 病院



AAHA CEO
ガース・ジョーダン氏



日本大学動物医療センター長
中山教授(左)と AAHA 新社長
Dr.マーク・シンプトン(右)

会場を含め今回の渡航中に、以下の先生方とご挨拶、名刺交換をすることができた。

- Garth Jordan, AAHA CEO
- Dr. Mark Thompson, DVM, CCRP, New President of AAHA
- Dr. Adam Hechko, Past board member of AAHA
- Dr. Kathleen Neuhoff, DVM, Ireland Animal Clinic
- Dr. Kevin Anderson, DVM, MPH, DACVPM, Medical Director of Otay Pet Vets
- Steve Culver, Practice Manager of Otay Pet Vets
- Dr. Amy Nadolski, DVM, DACVECC, Medical Director of VCA Emergency Animal Hospital & Referral Center

● 現地 AAHA 認定病院見学

今回、現地 AAHA 認定員の紹介で、2か所の認定病院を見学することができた。

1か所目は OTAY PET VETS である。サンディエゴから更に南へ 30 分ほど移動した箇所であり、メキシコとの国境に程近い。ここは一次診療施設であり、当院同様施設全体が AAHA 認定病院となっている（異なるケースについては後述）。ここでは1日 10 時間の診療を行っており、24 時間体制ではないが、救急対応も行っている。院長の Dr. Kevin Anderson のこだわりで患者とクライアントが精神的に不安を感じないように各所に気配りがされており、静かで動物と寛げる診察室や広大なドッグランなどが印象的であった。

コストカットの為に酸素のパイピングがされていないとの事で、必要な場所には酸素濃縮器が設置されていた。酸素濃縮器がキャスターに備え付けられ、麻酔器やベンチレーターと共に移動可能なセットとして組み立てられているものもあり、救急の現場での濃縮器の活用についてヒントを得た。



マネージャーのステイブ・カルヴァ氏(左)と院長の Dr.ケヴィン・アンダーソン(右)



隣には広いドッグランが併設





落ち着いた雰囲気 of ER
 気化器や酸素濃縮器が設置される



診察室
 不安を抱かないよう、リラックスできる工夫がなされていた



ツアー参加者と



移動式の人工呼吸器
 Iso/Sevo の気化器と下部に酸素濃縮器が設置



手術室
 ここでも酸素供給は濃縮器である



歯科処置室
 左右に麻酔器、歯科ユニット、中央に歯科用レントゲンが設置

2 か所目は VCA (Veterinary Centers of America : 米国内に 900 以上の病院を有し、4500 人以上の獣医師、600 人以上の専門医を擁する企業。2019 年に日本にも進出) が運営する 2 次診療施設である。ここは 24 時間体制の救急病院かつリファーマルセンターで、腫瘍専門医が 2 名、救急専門医が 2 名、循環器専門医が 1 名所属している。各科がそれぞれ AAHA のリファーマル認定を受けており、所属する全ての専門科が認定済みなので病院全体としてもリファーマル認定病院とされている (一部の診療科だけが認定されるケースもある)。大きな施設に多くのスタッフが働いており、訪問時もかなり忙しそうであった。院長の Dr. Amy Nadolski が院内を案内してくれた。

院内は広いのだが、患者も人数も多く手狭な印象を受けた。しか

し、スペースを有効に利用する工夫が数多くなされており、機能的であった。隔離室などに設置された跳ね上げ式の診察台は、狭い室内での消毒やケアの作業を楽にしてくれそうだ。インテンの真ん中に円卓がありドクターがデスクワークをしているのも、救急病院ならではのと感じた。来院状況だけでなく診療のステートメントがモニターに共有されていたり、VT 兼薬剤師が調剤を一括して担当していたり、Dr.の名刺が受付に並んでいて自由に手にすることができたり、麻薬や血液製剤の管理などなど、当院でも今後参考にしたい点が多々あった。



外観
ハイウェイ沿いで好アクセス立地



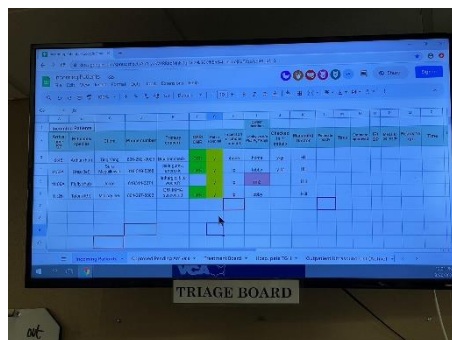
リファerral認定の証
院内全専門部門が基準をクリアしないと表に掲げることはできない



受付
Dr.のビジネスカードが並ぶ



感謝の手紙
モチベーション向上のため、スタッフ通路に掲示されている



受付状況モニター
トリアージ付きで表示
院内での診療のステータスも表示されていた



薬局
調剤は院内で行っているがVT 兼薬剤師が2名常勤しているそう



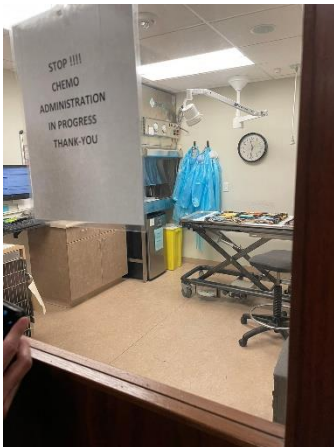
デスク
スタッフは処置室の中でデスクワークを行っている



処置室
各診察台は流しになっており、モニターやベンチレーターも備える



診察室
診察台は跳ね上げ式
病状説明等ができるようにモニターを備え、広く落ち着いた雰囲気



腫瘍科/抗癌剤処置室

安全キャビネットや防護衣などを備え、曝露に特別な配慮がなされている。処置中は立入禁止。



高濃度酸素濃縮器

通常のO2室で維持不可の際に使用。役割分担が明確で、2日で良化しなければ長期管理可能な別のVCAに転院となる。



隔離室

スペースを有効活用するため、診察台は跳ね上げ式。一旦この部屋に入った物は外部には決して出さないとの事。



血液製剤

血液型別に冷蔵庫内に保管。米国では血液製剤は購入できるが、これらはドナーの協力による。

● おわりに

この度、コロナ渦を経て4年ぶりに米国内での学会に参加することができた。やはり米国は国にも企業にも研究機関にもパワーがあり、新薬の開発や新たな治療法の探求に対する積極性が日本とは全く異なると感じた。特に動物薬の開発においては、大きく突き放されており、海外では次々に新たな技術が開発されていることを肌で感じる事ができた。日本国内でも様々なで勉強はできるが、やはり米国内の学会で実際にそれら新技術を開発した人々やそれらを用いて治療を行っている人たちに直接話を聞ける機会は貴重であり、刺激的だ。

今回このような機会をいただけたことに深く感謝し、得られた情報を院内で共有のうえ、診療に活かしていきたいと思う。参加を許して下さった加藤総合院長、野内院長、松沼GMをはじめ、留守中に私の分まで働き、患者を看てくれていた全てのスタッフに改めてこの場を借りて御礼を言いたい。ありがとうございました。